

## 早稲田大学 国際教養学部 国語 講評

## 〔総合分析〕

出題形式	全問マーク式
試験時間	60分(現代文2問、古文1問)
難易度	昨年並み

## 〔大問別講評〕

(一) 評論文。「隠喩的地理学」について。

出典:多木浩二『眼の隠喩』。

《本文字数:約2600字=昨年より約500字増加。設問数:5=昨年より1問減少。》

小問	難易度	コメント
問一・A	やや難	【空欄補充】直後のヴィコの引用文から考える。ハでは部分的にすぎる。
問一・B	やや難	【空欄補充】直後の「怪物」との対比。「自己を人間として」どう判断していたのか。ロの「客観」という語は24行目で古代人にふさわしくないものとして使われている。
問一・C	やや難	【空欄補充】自己の「本能的な怖れ」を、「納得できるようなものに変えた」ということ。
問一・D	標準	【空欄補充】「Dな分割」が結びつく「隠喩的な地理学」は、1行目に「想像力の中で」とあり、25行目には「心的なもの」とある。
問二	標準	【傍線部説明】直後の5行で言い換えられている。
問三	標準	【傍線部理解】直後の9行の内容から判断できる。
問四	標準	【テーマ理解】ニは24～25行に反する。
問五	やや難	【内容合致】ニは30～33行に、ホは46～48行に、それぞれ合致する。イは「野蛮な～恐怖」が、ロは「想像力を欠いていた」が、それぞれ不適切。ハは22行に反する。ヘがやや紛らわしいが、「地続きの空間に生きていた怪物」が15～16行の内容に反する。

(二) 随筆文。「衣服としての日本語」について。

出典:多和田葉子『カタコトのうわごと』。

《本文字数:約2400字=昨年より約200字減少。設問数:7=昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問六	易	【漢字】1=「証拠」、2=「衛兵」、3=「塗料」。いずれも正解したい。
問七	標準	【空欄補充】衣が重要でないとする考え方を批判している。ホは「原点」が不適切。
問八	やや難	【傍線部理解】ニとホで迷うが、ニは「時代遅れ」が不適切。
問九	やや難	【空欄補充】直前の引用文は「父と下士官たちを衣服で比較し自分をその中間」とする内容。イは「衣服」について、ニは「父」について、それぞれ説明されていない。
問十・X	標準	【空欄補充】「中味」である「身体」が「ない」という意味。
問十・Y	標準	【空欄補充】消去法が有効だろう。
問十・Z	やや易	【空欄補充】プラス評価を表す言葉が入る。
問十一	やや難	【理由説明】直前の引用文をプラス評価している。ハは「顔が衣服になっている」が、ホは「内容が現実的ではない」が、それぞれ不適切。
問十二	やや難	【主張合致】ハは最後の二つの引用文についての筆者の評価を適切に説明している。ヘは終わりから二つ目の引用文についての筆者の評価に合致する。ニが紛らわしいが、「五十年前」は限定しすぎであり、また、「文学の豊かさ」ではなく「日本語の豊かさ」である。

(三) 古文。出典：『大和物語』。

《本文字数：約 1000 字＝昨年より約 50 字増加。設問数：9＝昨年より 2 問増加。》

小問	難易度	コメント
問十三	標準	【人物把握】それぞれの傍線の前後の文脈から判断できる。ニは「よばふ男」を指している。
問十四	やや易	【空欄補充】各選択肢内の助動詞の意味を理解できていれば容易だろう。前後と整合性がとれるのは、伝聞の「なり」しかない。
問十五	標準	【人物把握】b＝男が出かけているときに家に残っていたのは誰と誰かを考える。f＝直後の「来し」の「し」が直接経験過去の「き」であることに着目し、過去に海を渡ってきたのは誰と誰かを考える。
問十六	やや易	【和歌解釈】前の男のセリフとのつながりから容易に判断できるだろう。
問十七	標準	【和歌解釈】腰の句にある「ばや」が「ば＋や」であることに注意する。上の句は、「身/を/憂し/と/思ふ/心/の/こり/ね/ば/や」である。
問十八	やや易	【空欄補充】男も心変わりしていたので筑紫の妻をとどめなかったという内容。
問十九	易	【主語判定】傍線を含む一文だけで判断できる。
問二十	やや易	【傍線部理解】前行の歌が筑紫の妻の歌なので、それに返事をできないのは男ともとの妻の二人である。筑紫の妻を乗せた舟が漕ぎ出してしまったので、男ともとの妻は返歌ができなかったという文脈。
問二十一	やや易	【内容合致】もとの妻と筑紫の妻との親密さを示す描写が本文に繰り返しでてくるので容易だろう。

〔総合コメント・今後の指針〕

全体の難易度は昨年並み。大問二で随筆文が出題され、15年と同じ形式に戻った。

大問一は、「隠喩的地理学」についての評論文。昨年並みの難易度である。昨年よりも本文は長くなったものの、設問が1問減少した。問一のA～Cは難しい。基本・標準レベルの設問でしっかり得点しておきたい。

大問二は、「衣服としての日本語」についての随筆文。昨年より難化した。抽象度の高い文章で、かつ、難しい設問が散見された。じっくり読まないで得点しづらい。苦戦した受験生が多かったのではないか。大問三の古文が簡単だったので、この大問にどれだけ時間をまわせたかで差がつくだろう。

大問三は、『大和物語』。設問は2問増加したものの、昨年より易化した。設問はほとんど基本レベル。大問二が難しかったぶん、この大問では満点ちかくを狙いたい。